

所蔵作品展

2025年度I「徳島のたからもの」

2025年9月6日[土]ー11月30日[日]

※会期中展示替えを行います(前期9月6日ー10月13日、後期10月15日ー11月30日)。

展示室1 徳島ゆかりの美術

西洋の伝統的な絵画理論と技法を学び、端正で古典的な裸婦像を多く描いた伊原宇三郎、戦後日本の前衛美術を代表する一人で、戦争や差別など社会的なテーマに鋭く切り込む作品を手がけた山下菊二のほか、日本に水彩画を広めた三宅克己など、日本近代美術史に大きな足跡を残した徳島を代表する作家たちの作品を展観します。



伊原宇三郎《陰》1946年

展示室1 描かれた徳島

徳島には鳴門の渦潮、祖谷の蔓橋といった景勝地があり、阿波人形浄瑠璃、阿波踊りなど豊かな郷土芸能が息づいています。山下菊二の兄に当たる谷口董美、戦前戦後の日本画壇で活躍した日下八光など徳島ゆかりの作家のほか、池田遙邨、黒崎彰など徳島の風景、風物に魅了された画家たちの作品を紹介します。



日下八光《阿南の海》1927年

展示室1 現代版画

サルバドール・ダリの版画集〈マルドロールの歌〉を3期に分けて公開します。

サルバドール・ダリ1
9月6日[土]ー10月5日[日]

サルバドール・ダリ2
10月7日[火]ー11月3日[月・祝]

サルバドール・ダリ3
11月5日[水]ー11月30日[日]

展示室2

珠玉の海外美術

2025年10月15日[水]ー11月30日[日]

ピカソやクレーなど、20世紀を代表する海外作家のコレクションを紹介します。

所蔵作品紹介

黒崎彰

〈赤い闇6〉

1970年 木版 紙 80.0×55.0cm

浮世絵の伝統技法を現代木版画に活かした表現で知られる、黒崎彰(1937-2019)の代表的なシリーズ〈赤い闇〉の1点です。強烈な赤と黒のコントラストと、謎めいた迷宮のような構成は、シリーズの特長であり、木版画家として彼の名を知らしめた作風です。作家は中学生の頃から油絵を習い、絵画の道を志しますが、西洋偏重の美術教育になじめず、思うように画風を確立できませんでした。大学時代に京都の古本屋や浮世絵店をめぐる中で、芳年など幕末浮世絵の魅力にとりつかれ、多色刷り版画の工程に興味を抱いたといいます。

独学で木版画を研究し、描こうしたのは人の業、情念の世界でした。ムンクやゴッホを思わせる表現主義的な作風から出発し、やがてドクロや行き止まりの階段などの象徴的な図像を組み合わせ、幻想的な空間を生み出していきます。心の奥、人間存在の根源を探っていくような、思索的なムードが黒崎作品には一貫してあります。

そうしたテーマをイメージ化する手段として、油絵よりも木版画が性に合っていたのでしょう。そして、彼の作品に興味を持った、浮世絵版画の摺師との協働作業がはじまったことにより〈赤い闇〉の精緻なイメージ世界が確立します。「伝統的な浮世絵を現代に蘇らせている」と世界の舞台で評価を受けました。1970年第7回東京国際版画ビエンナーレ展、第3回クラコウ国際版画ビエンナーレ展(ポーランド)と相次ぐ受賞で一躍注目を集めています。

こうして見ていくと、情念的な題材を知的に表してみせる計算ずくの制作姿勢が想像されるかも知れません。もちろんこの版数の多色木版画を刷り重ねて完成するためには、綿密な分解と手順の合理性そのものが表現プロセスの要点であることは間違いありません。



京都精華大学に版画専攻を創設し、国内外で技法研究にも熱心に取り組んだ、作家自身の技法に理解を深めるため、当館では本作の版木一式の寄贈を受けました。版下も含めた高精細画像を当館デジタルアーカイブに公開しています。そこで面白いことがわかりました。版木の上には、手順のメモに混じって、計画変更の指示や覚書が書き込まれており、また、使われていない版パーツも発見されました。設計が終わり、彫りと摺りを経た上で、仕上がり満足できず、版木の上でさらに格闘する作家の試行錯誤の時間と出合う思いがしました。画面に目を戻しましょう。幕末浮世絵や日本の祭礼、郷土玩具に見られるような色彩を意識したと作家はいます*。ひしめく不思議な形も、情念の世界を想起させはしますが、明白に絵解きできるものばかりでもありません。作家もまたイメージの追求を模索していたかも知れません。闇の奥底をのぞき込む、そんな創作の世界へ私たちも挑戦してみたいと思います。

(上席学芸員 竹内利夫)

*作家の言葉は『黒崎彰の全仕事』より(阿部出版 2002年)



歌川国貞(三代豊国)〈本朝風景美人競 播磨高砂〉1830年代(天保初期)

大阪・関西万博特別連動企画 |

浮世絵の華ー原安三郎コレクションー

2025年9月6日[土]ー10月13日[月・祝]

企画協力:中外産業株式会社

本記事の浮世絵7点は、中外産業株式会社 原安三郎コレクション蔵。複製、無断転載禁止。

原安三郎と浮世絵

この度、徳島出身の実業家、原安三郎(1884～1982)が蒐集した浮世絵を紹介します。原は父親が藍玉を扱う商家に生まれ、早稲田大学を卒業後、日本化薬株式会社社長・会長、経団連常任理事など政財界の要職のほか東京徳島県人会会長を長く務め、徳島市名誉市民となりました。「自主自尊」「質実剛健」を信条とした原、その姿をとらえた写真が残されています。撮影したのは、三島由紀夫を被写体とした『薔薇刑』などで知られる写真家、細江英公(1933-2024)。彼は、1973年から82年にかけて取材した計34人の財界人の写真集の冒頭に、原の来歴とポートレートを掲載しました。自邸で植物を写生する険しい表情に原の胆力が表れているようです。

原と浮世絵の出合いは昭和の始め、横浜から米国へ帰国する宣教師からコレクションを譲り受けた出来事にあったといえます。その後半世紀にわたり、作品を蒐集していきま

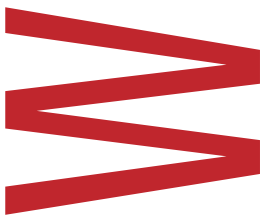


細江英公《原安三郎肖像》1973年 株式会社博進堂 2011年6月発行 『細江英公人間写真集 気骨 われらが父、われらが祖父。』より ©写真・細江英公、1973

した。今回はその中から徳島、及び世界中の国々が参加し、国内外の人々が行き交う場としての万博というテーマを踏まえ、「藍」「観光、旅」に関わる作品を展覧します。



徳島県立
近代美術館ニュース



The Tokushima
Modern Art Museum



134 July
2025



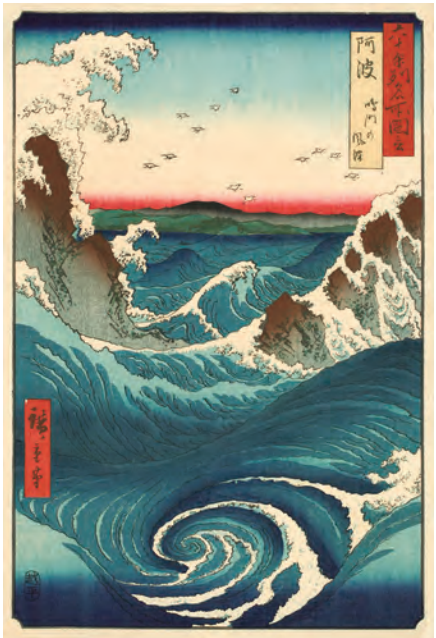
プルシアンブルー（ペロ藍）の登場

浮世絵は17世紀に黒一色の墨摺絵から始まり、18世紀後半には様々な色を取り合わせた多色摺の木版画、錦絵が誕生します。青色には主に露草や藍など植物由来の染料が用いられましたが、それらは変色しやすく、透明感のある色彩を表現するには不十分でした。しかし18世紀初頭、ドイツのベルリンで人工の合成顔料、プルシアンブルーが製造され、日本に輸入されるようになるとその様相が一変します。

ベルリンの藍、略して「ペロ藍」などと呼ばれたプルシアンブルーは耐久性に優れ、色彩の濃淡やグラデーションを生み出せることから、表現の幅が格段に広がりました。その鮮烈な美しさはたちまち評判となり、19世紀前半の文政から天保期にかけて、藍色を基調とする藍摺絵が生まれる画期となりました。

藍摺絵の流行

藍摺絵の最大の魅力は、青色の澄んだ色彩にあります。その先駆けとなった溪斎英泉（1791-1848）は、藍摺絵の美人画とほぼ同じ構図の多色摺の作品を手がけました。歌川国貞（三代豊国、1786-1864）の〈本朝風景美人競〉は、藍染の着物をまとった



歌川広重〈六十余州名所図会 阿波 鳴門の風波〉1855年



歌川広重〈浪花名所図会 今宮 十日恵比寿〉1834年頃



歌川広重〈浪花名所図会 堂じま 米あきない〉1834年頃



歌川広重〈木曾海道六拾九次 洗馬〉1836-37年頃

女性と、華やかな吊灯籠の内部の空間に日本各地の名所を藍摺で描いた揃物です。透明感のある青色が画面に上品な彩りを添えています。

藍摺絵は、これまで人物画が本流であった浮世絵に大きな変化をもたらしました。それは、空や海など青色が主となるモチーフを自在に表現できるようになったことで、新たに風景画が台頭したことです。この時期、消費経済の拡大とともに庶民が娯楽として旅を楽しむことができるようになり、人流が活発化すると、各地の名勝、風物に取材した名所絵が大衆的な人気を博します。そのブームを率いた筆頭格が、歌川広重（1797-1858）でした。

旅へのあこがれ

当初、役者絵や美人画など幅広いジャンルを手がけた広重ですが、天保初期に発表した保永堂版〈東海道五拾三次〉が爆発的に売れたことで、以後、名所絵に軸足を移していきます。この時期に刊行された上方三部作の一つ〈浪花名所図会〉の内、たとえば「今宮 十日恵比寿」は海上の安全を祈る祭礼を、「堂じま 米あきない」は商取引の現

場をとらえています。様々な人間が交わる拠点において、そこには風景だけではなく、人々の生活風俗や人間模様が活写されています。

江戸の日本橋と中山道の宿場69ヶ所を描いた〈木曾海道六拾九次〉もそうした作品の一つです。「洗馬」は、たなびく雲のような淡い藍と紅の重なりが夕陽の余韻を見事にとらえており、冴えわたるように白い満月、柳や薄を揺らす夕風、その下で仕事を終う様子の船頭たちに寂寞とした情感、人間の哀感が滲んでいます。同作の中でも、特に格調高い場面として知られています。

江戸版バーチャル観光コンテンツ！

広重は最晩年にかけて、構図や色遣いに新味を加えた名所絵の大作を発表していきます。〈六十余州名所図会〉は五畿七道及び江戸の名所に取材した作品で、河川や海に用いられる青色、さざ波の表現が目を引きます。中でも徳島を主題とする「阿波鳴門の風波」は、逆巻く渦潮が複雑で深みのある色彩の重なりと、光り輝く雲母摺によって表現されており、広重の美に対する飽くなき探求心と卓越した色彩感覚が見て取れます。特に、波間の表現に見られる深い藍色は、藍玉の商家に生まれた原の心をとらえたことでしょう。本展の最大の見所の一つです。

〈名所江戸百景〉は名実ともによく知られた広重の代表作で、その特徴は近景を極端に拡大したり、上空から見下ろすかのような俯瞰の視点で描く構図にあります。たとえば端午の節句の情景をとらえた「水道橋駿河台」では、風にそよぐ鯉幟が前面に大きく配され、鯉はまるで生きているかのような瑞々しい生命力を湛えています。

一方「大はしあたけの夕立」では、急な雨に見舞われ対岸まで行き急ぐ橋上の人々を俯瞰で描き、濡らした版木に絵具を乗せていく「当てなしぼかし」の技法を用いて、不安定な空模様を表現しています。このような斬新な構図と熟達した技法による表現

は西洋の画家たちの強い関心を引き、19世紀後半のヨーロッパにジャポニズムという日本趣味の流行をもたらしました。

〈六十余州名所図会〉、〈名所江戸百景〉は初摺で保存状態が極めて良く、原コレクションを代表する逸品です。これらの作品は、県内の美術館では初公開となります。本展を通じて、原安三郎が愛でた浮世絵の魅力を再発見する機会としていただけると幸いです。

（主任 三宅翔士）



歌川広重〈名所江戸百景 水道橋駿河台〉1857年



歌川広重〈名所江戸百景 大はしあたけの夕立〉1857年

大阪・関西万博特別連動企画

浮世絵の華—原安三郎コレクション—に関する催し

ギャラリートーク

「原安三郎の浮世絵コレクションについて」

9月6日〔土〕14時—15時

講師:小池満紀子(中外産業株式会社取締役美術品担当)

展示室2 申込不要 要観覧券

学芸員による展示解説

(スライドトーク付き)

9月13日〔土〕、28日〔日〕 いずれも14時—15時

講師:三宅翔士(主任)

申込不要 要観覧券 美術館講座室(3F)に集合

こども鑑賞クラブ+

9月27日〔土〕14時—14時45分

進行:美術館スタッフ

対象:小学生 美術館ロビーに集合 定員30名程度

電話申込(当日参加可) 無料(保護者は要観覧券)

徳島県立近代美術館ニュース

第134号 2025年7月1日発行(7月号)

発行: 徳島県立近代美術館

770-8070 徳島市八万町向寺山

文化の森総合公園

TEL:088-668-1088 FAX:088-668-7198

美術館や展覧会についての情報は

当館ホームページをご覧ください。

<https://art.bunmori.tokushima.jp/>

